

# 新報

島根県教育庁  
隠岐教育事務所  
隠岐の島町湖原4  
電話2-9772

## 変わらないもの

満開の桜の中で気持ちのよい始業式を迎えて三か月、あつという間に一学期が終わろうとしています。子供たち一人ひとりにとって、先生方にとってどんな一学期だったでしょうか。日々の学校生活や行事を通して様々な感情が生まれるのは、挑戦した証拠、考えている証拠、動こうとしている証拠。一学期のゴールも見えてきたところで、もう一度これまでを振り返り、よい締めくくりとなるよう願っています。

さて、六月中旬より第一回目の学校訪問を行ってまいります。お忙しい中、時間を作っていただきありがとうございます。先生方の思いに触れ、子供らしい表情を見ることができ、学校って素敵な場所だと改めて感じているところです。

「今も昔も大事なことは変

わらんけどな。」

ある学校で、校長先生がつぶやかれた言葉です。この言葉を聞き、昔の自分のことを思い出しました。小学校時代、私は運動が得意ではありませんでした。特に器械運動は、「痛い」「怖い」「難しい」のイメージが強く、授業を休むための理由をよく考えていました。しかし、心に残っているのは、体育の時間が楽しかった記憶です。前向きに取り組めるような作戦名、自分に合ったものを選ぶようなコース設定、見たこともない支援の道具など細やかな仕掛けがたくさんありました。何時間もかけて身に付いたのは、ほんの少しの技でしたが、達成感が満たされたことを数十年経った今でも覚えていています。自己選択・自己決定で課題に取り組み「でき」と実感したり、友達のアドバイスや応援をもらった

りしたことはもちろんですが、一番嬉しかったのは、先生が他の誰かと比べることなく私の成長と一緒に喜んでくれたことだったように思っています。『自分のやろうとすることが認められ、応援してもらっていると感じて初めて学校が居場所であると思えるようになりませう。』と生徒指導提要(一三二項)にもあるように、目の前の子供の可能性を信じ、その子のよさや頑張りを目を向け支えていくことで、子供たちが生き生きとする居場所が生まれるものと思います。

成長は、なかなか目に見えにくいものです。身長のように、伸びが数値で見とれることができないからこそ、プラスの目で小さな成長を捉え、子供たちに返していくことが教師の大事な役割の一つだと思います。努力が実って結果が出るまでには、時間がかかりませう。かかるのが当然で、だから見えにくいのです。価値づけの積み重ねを大切にしていこうと見えるものになっていくのではありません。学校訪問を通して、生徒指導の中に、時代の変化に左右されない温かいものが流れていることを感じています。

(文責 池田)

## 助けを求めることができるということ

本県では、令和三年に策定した「しまね特別支援教育魅力化ビジョン」において、発達障がいのある児童生徒への支援を推進することとしていませう。今年度は、LD(学習障がい)支援調査研究事業を実施することとなり、先日管内の教育委員会において、聞き取り調査が行われませう。学習障がいの中でも、発達性読み書き障がいは、日本語圏で約8%の出現頻度であると報告されていませう。通常の努力では、文字の習得が困難な障がいであるにもかかわらず、周囲からは「やる気がない」「怠けている」「知的な遅れがあるのではないか」などと誤解を受けることが少なくありません。そのため、適切な指導・支援が遅れると、いったことにながっていませう。

LDの教育支援の動きが芽生えたのが一九九〇年代です。三十年以上たっているにも関わらず、「読み書き困難」については、周囲の理解が十分ではないように感じませう。その理由を全国LD親の会は「発達障害者の頭在化されにくい読み書き困難についての実態調査(H三十)」の中で次のように述べていませう。一、ASD、ADHDなどの他の発達障がいと併存することが多く、行動や情緒の特性の方が注目されやませう。二、初等教育で身につけるべき基礎的な能力、学力という認識が社会通念としてあり、読み書きの苦手が障害によるものと理解されにくい。三、「全く読めない」「全く書けない」ではなく、その状況が環境や本人の特性や体調等によって変わることで、周囲の理解を難しくしていませう。さらには、本人自身が読み書きが苦手であることを周囲に知られたくないと思っていることが、大人になっても支援を求めないことにながっていませう。

令和六年四月一日から、合理的配慮の提供について義務化されました。おそらく、周囲の理解はさらに進んでいくことではませう。しかし、合理的配慮の提供で最も大切なのは、本人の意思の表明がことのできるかどうかということではませう。

自ら助けを求めることができる人は、自己肯定感が高いと言われたいませう。読み書きは、学習全般に関わることです。その困難は自己肯定感の低下を招きやませう、早期発見、早期支援が重要であると言えませう。

六月末、隠岐の島町と海士町では、小学校一年生の担任を対象に「ひらがな読みの実態把握」についての研修を行いました。雑賀小学校の取組を参考に、一年生全児童のひらがな読みの力の底上げと、発達性読み書き障がいの早期発見、早期支援につなげるというものです。学校単位では数年前から行われていませうましたが、町として、一年生の担任が変わっても、どの学校でも全ての子供たちに確かなひらがな読みの力を付け、読み書き困難であっても学びを止めない取組がスタートしました。時期を逃さない指導・支援により、子供が「読めないから、書けないから手助けが欲しい」と言える環境を整える大きな一歩になると期待していませう。

(文責 角脇)

